

# analog

2015  
AUTUMN  
vol. 49



「こだわり」は人生を豊かにする!

特集・新しい音の開拓者達

## レコード再生 ブランド

間もなく新宿PIT INN50周年!

ピットインインタビュー

ジョージ大塚さん  
〈前編〉

特別インタビュー

仲井戸麗市さん

いまこそクラシックカメラを楽しもう  
「イタリア編 3」

新型アナログプレーヤー  
続々登場

好評連載第2回

「美」の匠  
銭湯絵師





Finest Music Components  
Hand made in Germany



## MONO II

ACCUSTIC ARTS リファレンスシリーズの新製品、モノラル・アンプとして設計

出力: 300W 8Ω ¥2,600,000/ペア/税別

[hifjapan.co.jp](http://hifjapan.co.jp) / 03-3288-5231

特別レポート

ACCUSTIC ARTS

# 充実したラインアップを持つ 注目すべきドイツのハイエンド・ブランド

Text by  
石原 俊  
Shun Ishihara

Photo by  
田代法生

## POWER ES-MK2

プリメインアンプ ¥670,000(税別)



## PLAYER ES-MK2

CDプレーヤー ¥670,000(税別)

**前身となる会社の  
技術力を引き継ぎ創業**

アコースティック・アーツの  
主要な製品を聴く機会に恵ま  
れた。

アコースティック・アーツは  
自動車産業で有名なシュトゥ  
トガルトに本拠を置くオーデ  
ィオ・エレクトロニクス・ブラ  
ンドである。創業は1996年  
で、比較的若い企業といってい  
だろ。だが、同社にはいわば先  
史時代がある。現会長のフリ  
ツ・シャンクは、工業用ロボ  
ツ・シャンクは、工業用ロボ  
ツの制御技術を扱うシャンク  
社を30年にわたって経営して  
いた。シャンク社は1000人の  
従業員を擁する中堅企業で、  
高い技術力を有しており、主  
な納入先はタイムラーベン  
ツ、BMW、アウディなどであ  
った。

音楽へのやみがかたい情熱を胸  
に秘めていたフリッツはシャ  
ンク社を売却し、SAE(シャ  
ンク・オーディオ・エンジニア  
リング)を立ち上げた。SAEは  
録音とオーディオ機器の開発を  
業務としており、アコース  
ティック・アーツはその製品  
のブランドというわけだ。シャ  
ンク社で培った製造技術の  
ノウハウが引き継がれている  
のは言うまでもない。

SAEを牽引するのはフリ  
ツの2人の息子だ。弱冠15歳  
でスピーカーやネットワーク  
回路の設計を行っていた兄の  
マーティンがチーフエンジニア  
を務めている。一方、弟のシ  
ュテファンは録音エンジニア  
と営業を兼務している。

オーディオ・エレクトロニ  
クス・ブランドと目されている  
アコースティック・アーツが、  
その一号機はスピーカーだっ  
た。これはPROLINE MS1と  
いう2ウェイ・ブックシェルフ  
型のスタジオ用モニター機で  
、SAEの録音事業のために開  
発したのを商品化したもので  
ある。近接リスニングに特化  
したこのモデルをコンシュー  
マー用に改めたのがPROLINE  
MS1 MK2で、これは現行の  
カタログモデルだ。また3ウ  
ェイ・8ドライバユニットの  
超大型機、CONCERTOもライ  
ンアップしている。

**ドイツ車の剛性感を  
彷彿とさせるモデル**

アコースティック・アーツの  
製品の最大の特徴は、美しく  
て剛性の高い筐体デザインに  
ある。このデザインコンセプト  
は製品の細部まで徹底して  
おり、

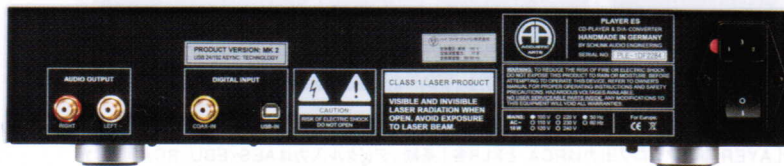
緩みはもろいこと、がっし  
りとした手応えがない部分  
はないといっても過言では  
ない。これは国産機には真  
似のできない製品作りであ  
らう。昨今は我が国のオー  
ディオ・エレクトロニクスも  
ずいぶん頑丈に作られる  
ようになったが、ドイツ  
的なシッカリ感は残念ながら  
存在しない。クルマも同じ  
で、国産車にはドイツ車  
のような剛性感はない。お  
そらくは民族的なサムシ  
ングが、両国のオーディオ  
製品作りに大きく影響して  
いるのだろ。

スペック表を注視すると、  
アコースティック・アーツの  
プリンシパルやパワーアンプ  
が、リニアリティを寝かせ  
よう設計になっていること  
に気づく。昨今の国産ア  
ンプは出力インピーダンス  
の低下に出力値の上昇が  
リニアに反応するような  
設計になっているの  
に対して、アコース  
ティック・アーツは上  
昇の度合いが緩いのだ。  
リニアリティ原理主義者  
はこれを「悪」と捉  
えるかもしれないが、  
実際にスピーカーを  
ドライブする上では  
有利に働くこともある。  
SN比の稼ぎ方は古典  
的だ。電子式ボリューム  
を採用しているわけ  
でもなければ、多数  
の素



POWER ES-MK2のリモコンはボリュームの操作のみとシンプル

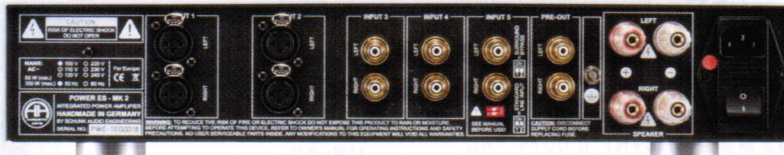
PLAYER ES-MK2の付属リモコン。ESシリーズの他モデルも操作可能



PLAYER ES-MK2の背面。アナログ出力はRCA端子1系統。デジタル出力はRCA同軸と光TOSを装備する

**Specifications**

<PLAYER ES-MK2> ●対応ディスクフォーマット：CD、CD-R、CD-W ●アナログ出力：RCA 47Ω ●デジタル入力：S/P DIF 75Ω (RCA)、USB2.0 (24/192 asynchronous) ●対応データフォーマット：up to 24bit/192kHz (ALAC、FLAC、AIFF、WAV etc.) ●DAC：S/P-DIF 75Ω (RCA)、USB 2.0 (type B) ●DAコンバーター：24bit/192kHz アップサンプリング ●歪 (THD+N)：0.0014% ●サイズ：482W×96H×370Dmm ●質量：7kg  
<POWER ES-MK2> ●アナログ入力：XLR×2、RCA×2、RCA×1 (LINE/SURROUND-BYPASS 切り換え) ●入力インピーダンス：XLR 50kΩ×2、RCA 50kΩ ●出力 (THD+N=0.1%)：90W/ch (8Ω)、120W/ch (4Ω) ●SN比：-90dB (ref. 6.325V) ●歪：0.0049% (8Ω、1kHz、10W)、0.0089% (4Ω、1kHz、10W) ●ダンピングファクター：500以上 ●消費電力：40W (無負荷) ●サイズ：482W×96H×400Dmm ●質量：約11kg



POWER ES-MK2のリアパネル。入力端子は前継機では入力端子はRCAのみだったが、本機からXLR入力が増加された

子を並列接続するわけでもなければ、多数のトランスを搭載するわけでもなく、ハイグレードなパーツを高剛性なシャーシに組み上げることで良質な音を目指すしている。当然のことながらコストは上昇し、それは購入者が負担することになるわけだが、それを承知で製品開発をするあたりが、いかにもドイツのメーカーらしい。

### ●USBシリーズ どのような音楽を 聴いても安心していられる

アコースティック・アーツの製品群は三つのグレードに分類される。エントリークラスのESシリーズと、ハイクラスのTOPシリーズと(モデル名に「I」がつく)、ハイエンドのREFFERENCEシリーズ(モデル名に「II」あるいは「III」がつく)である。今回はESとREFFERENCEの代表的なモデルをテストに供した。

PLAYER ES・MK2は最もベーシックなCDプレーヤー/USB DACである。MK2になってUSB入力が192kHz/24bitまでの対応となった。エントリークラスだが作りは上級機譲りで、ディスクト

レイの左右にガイドロッドが取り付けられている。これは単なるデザインのためのデザインではなく、トレイの剛性を高めるうえで効果的であるといえよう。細かい操作はリモコンでするのが便利だが、本体の操作感は素晴らしい。

POWER ES・MK2はシンプルなプリメインアンプである。MK2になって本格的なヘッドフォンアンプの回路は使えない時はオフにできるので、搭載による音の劣化は全くない。出力は90W(8Ω)/120W(4Ω)×2と控えめだが、実際にスピーカーを鳴らす上では十分だ。

このペアが聴かせるサウンドはこのクラスとしては異例に剛性が高い。音がキリリと引き締まっており、低音の支えがしっかりしており、どのような音楽を聴いても安心していられる。この安心感はドイツ製の小型高級車の乗り心地に一脈通じるものがある。

### ●REFERENCEシリーズ 基本は同じだがパワー感と スケール感がまるで異なる

PLAYER IIは最高級プレ

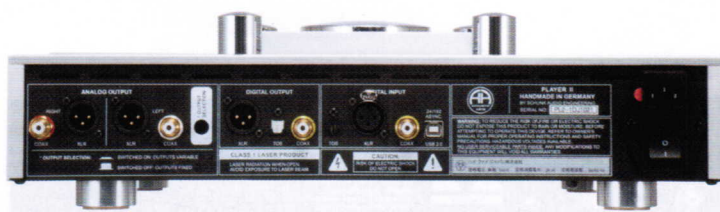
イヤー/USB DACだ。天板中央のスライドハッチに注目。このメカニズムは機械美学的に現代の最高傑作である。もちろんサウンド的にも効果は大きく、ディスクメカニズムを機械的・電氣的に完璧にシールドしている。ディスクはスタビライザーでスピンドルに固定する。なお、このモデルは音量調整回路(出力段は真空管を使用)を有しているのでパワーアンプに直接接続できる。

MONO IIはモノラル・パワーアンプである。内容的には名品の誉れが高いAMP IIのモノラルバージョンだ。筐体はスリムなタワー型で、ステレオ機よりもはるかに扱いやすい。チャンネルセパレーションはもとより、左右の個体に単独で給電することなどから、パワーハンドリングの面でもステレオ機よりも有利である。出力は300W(8Ω)/700W(2Ω)で、正比例的ではないものの、ドライブ能力は非常に高い。

両者が聴かせるサウンドはESのペアと基本的には同じである。しかしながらパワー感とスケール感がまるで異なる。その違いはメルセデスのAクラスとSクラスの違いにも匹敵しよう。

小さなセッションならば中型のトールボーイ型スピーカーでも、等身大以上の音を聴くことが可能である。音楽的には全方位的で、どんなジャンルにも対応するが、どんな音楽も高剛性な、

いわばアコースティック・アーツ調に染め上げ、それだけでものすごく説得力がある。単にコストパフォーマンスだけでは評価できない上級者向けのペアである。



PLAYER IIのアナログ出力はRCA とXLR各1系統。デジタル入力にはAES/EBU、RCA同軸、光TOS、USB 2.0の4系統。デジタル出力はAES/EBU、RCA同軸、光TOSの3系統を装備

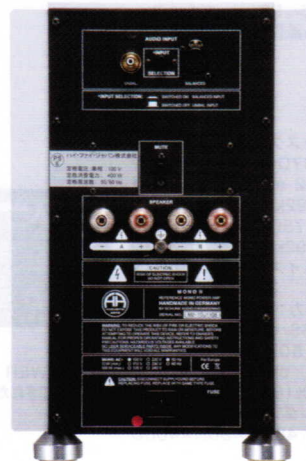
### Specifications

<PLAYER II> ●CDメカ: CD-Pro 2LF/3ビーム ガラスレンズ レザー ●対応フォーマット: 24bit/192kHz(ALAC、FLAC、AIFF、WAV)に対応 ●歪(THD+N): 0.005%/24bit(22Hz~22kHz) ●消費電力: 最大30W ●使用真空管: 12AX7(軍用規格/4回の選別とペアリング) ●サイズ: 482W×130H×375Dmm ●質量: 18kg  
<MONO II> ●電圧利得: 31.0dB ●電源トランス: 1,200VA(W) ●電源キャパシター: 80,000μF ●入力インピーダンス: バランス(XLR) 2×20kΩ、アンバラ(RCA) 100kΩ ●出力: 700W(2Ω)、500W(4Ω)、300W(8Ω) ●高調波歪(THD+N): 0.007%/4Ω、1kHz、10W負荷 ●SN比: -104dB(ref. 6.325V) ●消費電力: 100W(無負荷) ●サイズ: 240W×350H×430Dmm ●質量: 25kg ●オプション: 専用ベース MONO II AMP BASE(¥140,000/ペア、税別) ●取り扱い: (株)ハイファイ・ジャパン



PLAYER IIの重量感ある付属リモコン

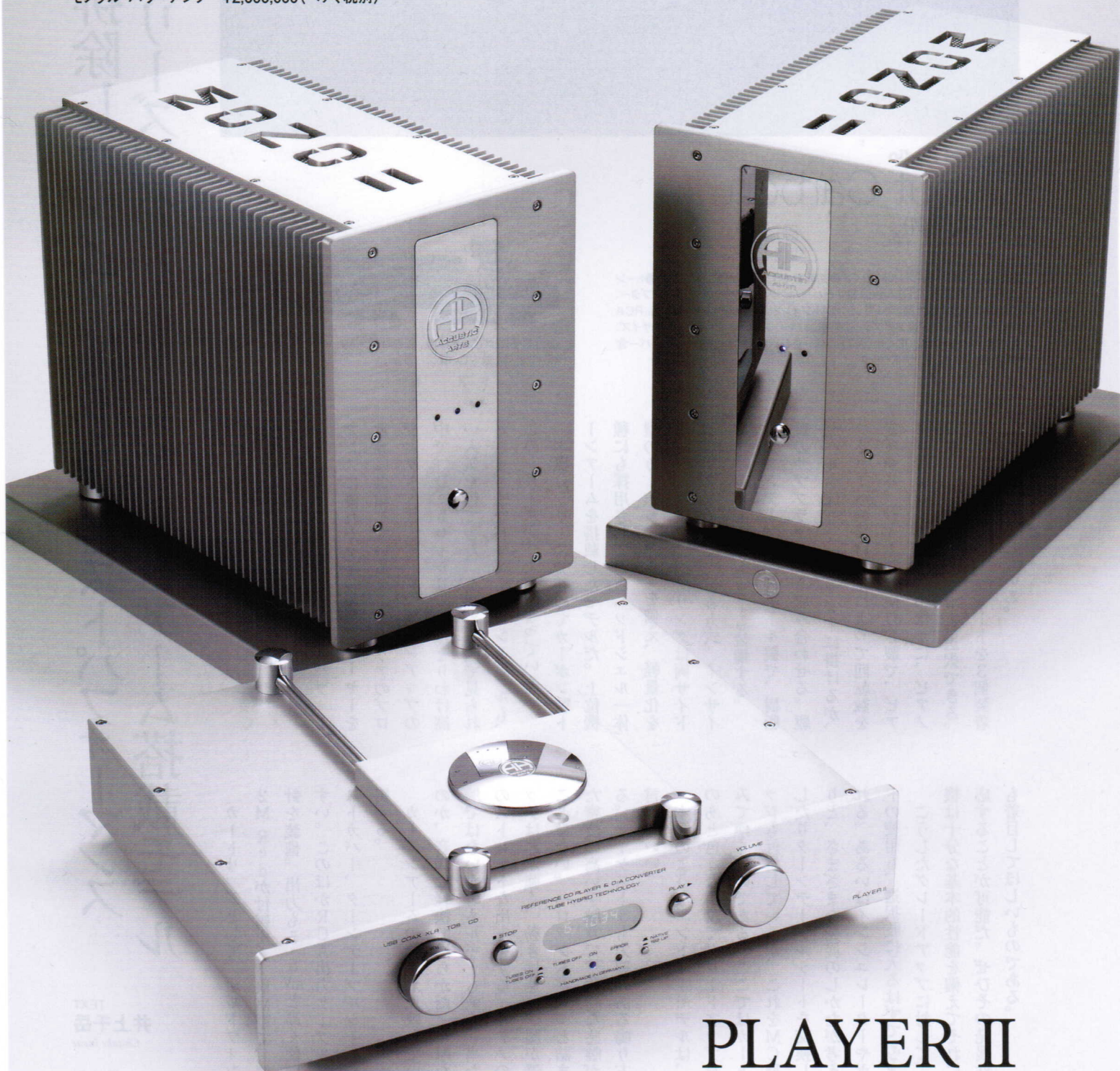
MONO IIの背面。入力にはRCAとXLRをプッシュスイッチで切り換える方式。スピーカー出力は2系統を持つ



コストパフォーマンスだけでは  
評価できない上級者向けのペア

## MONO II

モノラル・パワーアンプ ¥2,600,000 (ペア、税別)



## PLAYER II

CDプレーヤー ¥2,500,000 (税別)

YAMAHA

# A-S1100

¥200,000(税別)

TEXT  
石原 俊 Shun Ishihara

Photo by  
田代法生



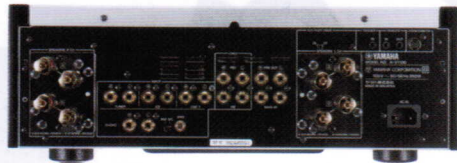
**Spec** ●定格出力:90W+90W/8Ω(20Hz~20kHz、0.07% THD)、150W+150W/4Ω(20Hz~20kHz、0.07% THD) ●入力感度/入力インピーダンス:PHONO MC→100μVrms/50Ω、PHONO MM→2.5mVrms/47kΩ、CD 他→200mVrms/47kΩ、MAIN IN→1.0Vrms/47kΩ ●入力端子:RCA×4、MAIN×1、PHONO(MM/MC)×1、REMOTEX1、TRIGGER×1 ●出力端子:REC×1、PRE×1、REMOTEX1 ●サイズ:435W×157H×463Dmm ●質量:23.3kg ●取り扱い:(株)ヤマハミュージックジャパン

信号経路を最短化した美しい設計  
高品位フオノイコライザー搭載機

滑らかでほのかに甘い質感が  
脳内に広がるような音色感

本機はヤマハの最上級プリメイ  
ンアンプシリーズの末弟である。  
内容的には兄貴分のA・S210  
0のバランス式プリアンプセクシ  
ョンをシングルエンド化したもの  
で、出力は90W×2(8Ω)だ。フ  
ロントパネルには美しいメーター  
がマウントされている。トーンコ  
ントロール等のコントロール機能  
も充実しており、使い勝手は極め  
て良い。標準装備されたフオノイ  
コライザー部は非常に凝ったもの  
だ。これはLP全盛時代にヤマハ  
が開発した回路を踏襲したもので、

MM/MC対応なのだが、MCの  
昇圧はディスクリットで組まれた  
本格的なヘッドアンプが行う。M  
M/MCの切り換えスイッチはリ  
アパネルにあるが実用上の不便は  
なく、信号経路が短いので音質的  
にも精神衛生上も好ましい。  
今回はLPに特化したテストを  
行ったのだが、極めて説得力の強  
い音である。プレーヤーの調整の  
良否にもよるが、超高級CDプレ  
ーヤーを軽く凌駕するような音が  
すんなりと得られる。解像度は極  
めて高く、ディテールを聴き漏ら  
すことはまずない。音色感も素晴  
らしく、LPらしい滑らかでほ  
かに甘い質感が脳内に広がる。



スピーカーターミナルは、無垢の真鍮材から削り出したハイグレードなスクルータイプを採用

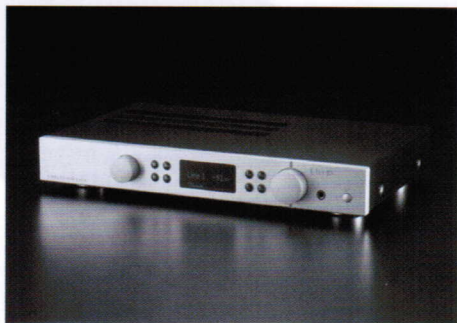
Creek

# Evolution 100A

¥370,000(税別)

TEXT  
石原 俊 Shun Ishihara

Photo by  
田代法生



**Spec** ●出力:110W×2(8Ω)、170W×2(4Ω) ●周波数特  
性:10Hz~100kHz(±2dB/ライン)、10Hz~50kHz(±2dB/  
バランス) ●入力感度:410mV ●入力端子:RCA×5(プリ部)、  
RCA×1orXLR×1(パワー部) ●出力端子:RCA×1、6.3mmス  
テレオ標準×1 ●サイズ:430W×60H×280Dmm ●質量:9kg  
●取り扱い:(株)ハイ・ファイ・ジャパン

高い実力と発展性を兼ね備えた  
スマートな高出力プリメイン機

すらりとしたエネルギーバランス  
英国調の正統派サウンドと言える

本機は英国クリーク社の最もハ  
イパワーなアンプである。最大出  
力は110W×2(8Ω)と、この  
サイズのモデルとしてはかなり高  
い。終段の素子はバイポーラMO  
S FETで、二段ターリントン回  
路で構成されている。バイアスの  
かけ方は通常のAB級とはやや異  
なるG級という方式だ。この方式  
の回路は低い信号レベルで動作す  
ると電源電圧が低くなるので、A  
B級よりも効率が高く、発熱が少  
ないので使いやすい。プリアンプ  
部の音量調整回路は電子式で、し

っかりとしたノイズ対策がなされ  
ている。オプションは豊富で、M  
Fオノノカード、MCフオノカー  
ド、チューナーモジュール、US  
BDACモジュールなどが用意さ  
れている。試聴機にはフオノモジ  
ュールが装着されていたのだが、英国調の  
でCDを聴いたのだが、英国調の  
正統派サウンドである。エネルギ  
ーバランスはすらりとした摩天楼  
型で、とりたてて低域を強調して  
いるわけではないのだが、出るべ  
き時には轟然たる低音がリスニン  
グルームを揺るがす。とはいえ基  
本的には現代的な音場型だ。音楽  
的にもモダンで、客観的な解釈が  
クールかつスマートである。



オプションを搭載することでDAC機能やフオノイコライザー機能を  
装備可能

●ALBORE JAZZ URL:http://www.alborejazz.com/ ●オフィス・サンビーニャ URL:https://www.sambinha.com/

●日本コロムビア TEL:03(6895)9001 ●(株)マーキュリー TEL:03(5276)6803

※マーキュリー取り扱いのアナログレコードは“制作元/品番/オリジナルレーベル/取り扱い”と表記します

●(株)ハイ・ファイ・ジャパン TEL:03(3288)5231 ●プロダクション・デシネ URL:http://www.productiondessinee.com/

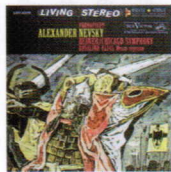
●ローソンHMVエンタテイメント TEL:03(5784)1390 ●(株)ユキム TEL:03(5743)6202

※問い合わせ先のないタイトルは、筆者がレコードショップにて購入したタイトルです

石原 俊

## プロコフィエフ:カンタータ「アレクサンドル・ネフスキー」

ロザリンド・エリアス(ソプラノ)、フリッツ・ライナー(指揮)、シカゴ交響楽団



Analogue  
Productions  
AAPC2395  
RCA  
マーキュリー

200g

### ロシア的メロディが民族の誇りを高める

「アレクサンドル・ネフスキー」は同名の映画(1938年封切り)のために作曲した素材をもとにしたカンタータである。アレクサンドル・ネフスキーは中世ロシアの英雄で、ドイツ騎士団やモンゴル軍団の侵入を阻止した人物だ。この作品ではロシア的なメロディ/ハーモニーを英雄的に扱うことで民族の誇りや対独戦の戦意高揚を掻き立てている。CDではいくつかの演奏録音に接しているが、アナログを聴くのは初めての経験だ。いや、この作品は絶対にアナログですよ。低音の出方がまるで違う。ズキーンとくる低音楽器が英雄的でロシアの愛国心(?)が沸々と心に湧き起ってくる。演奏は完璧。録音も素晴らしい、オーディオ的に聴いて非常に興味深い。

石原 俊

## フェスティヴァル ～チャイコフスキー、ムソルグスキーほか

フリッツ・ライナー(指揮)、シカゴ交響楽団



Analogue  
Productions  
AAPC2423  
RCA  
マーキュリー

200g

### ロシアの楽しい管弦楽曲を集めた1枚

ロシアの管弦楽曲を集めた楽しいアルバムである。このLPの存在は学生時代から知ってはいた。しかしながらその当時はジャケットの子供っぽいデザインが好きになれなかった。いや、それよりも選曲が子供だましみたいでイヤだった。当時はドイツ音楽こそが本流でロシアの作品はイロモノだと思っていたのだ。しかしながら還暦間近のいま、このジャケットを見ると愉快的気分になってくる。選曲もいいじゃないか。アナログで聴くロシア音楽は格別だ。音にコクがあって、低音がドーンと出て(特に「スラヴ行進曲」の大太鼓がすごい)、メロディにグルーブ感がある。演奏は現代のそれとは別の意味合いで完璧。録音にもすごくお金がかかっている豪華だ。

村井裕弥

## シューベルト:フォー・トゥー

ギル・シャム(Vn)、イェラン・セルシェル



ANALOGPHONIC  
DG43027 (2枚組)  
DG  
マーキュリー

180g

### 2人の優しい対話を聴いているかのよう

セルシェルは恐ろしくレパートリーの広いギタリストだが、バッハを弾いても、ピアソラを弾いても、ビートルズを弾いても、器用貧乏に聴こえない稀有な存在。意外な音楽家との共演盤でも知られ、いまの自分に満足せず1+1で3以上をねらう姿勢が高く評価されている。当盤は2002年トロントのグレン・グールドスタジオで収録。92年に収録され大ヒットした『パガニーニ・フォー・トゥー』の続編にあたるが、ギル・シャムとの相性は、音色・音楽性共に絶妙で、2人の優しい対話を聴いているかのよう(リアルな鼻息もほほえましい)。「シューベルトって、どこが良いのか分からない」という方にも、「何かよいBGMはないか」という方にも推奨できる。

村井裕弥

## バッハ:無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ

ギドン・クレーメル(Vn)



ANALOGPHONIC  
DD43031 (3枚組)  
Decca  
マーキュリー

180g

### 天才ヴァイオリニストの絶頂期の録音

20世紀から21世紀にかけてのヴァイオリニストについて語るとき、クレーメルの名を外す人はまずいないだろう。もちろん彼はいまでも世界第一級の奏者なのだが、音楽祭を創設して室内楽に取り組んだり、室内オケを率いたりと、ソリストとしてのパワーは幾分減じた印象。この曲には21世紀に入ってすぐ録音された新盤もあるのだが、この80年盤を推す識者が多いのはその証といえるだろう。初期CDで気になった硬さや刺激感が消え、この時期のクレーメル特有のアグレッシブな美音が「これでもか」と聴き手に迫る。感じるがまま進んでいただけなのに、振り返ってみるとバランスも細部も最高天才の絶頂期とはそういうものなのだ。

鈴木 裕

## モーツァルト:セレナード「グラン・パルティータ」

シュトゥットガルト・ウインズ



¥4,900  
tacet  
LP209  
ハイ・ファイ・ジャパン

180g

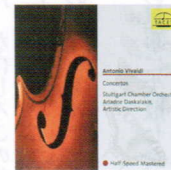
### こだわりの機材で現代的な録音を実現

シュトゥットガルト放送管弦楽団のメンバーから構成されているのがシュトゥットガルト・ウインズだ。元々演奏家であり、エンジニアのアンドレアス・スビーアが主宰、トーンマスターを務めるタチェット・レコードの新作のひとつ。ノイマンU47、U67といった定評のあるマイクなどを使いながら、マイクプリアンプ等、エレクトロニクスは真空管デバイスを使ったものにこだわっている。といっても懐古的な音を目指しているわけではなく、録音はワイドレンジで現代的な音場感を持ったもの。スピーカーからの音離れは良く、13の楽器がまとまり良く展開しつつも、個々の楽器の分離が素晴らしい。ハーフカットによる180g盤。

鈴木 裕

## ヴィヴァルディ:協奏曲集

アリアドネ・ダスカラキス(芸術監督)、シュトゥットガルト室内管弦楽団



¥4,900  
tacet  
LP205  
ハイ・ファイ・ジャパン

180g

### ソロ達とバックの響きが交錯する好録音

タチェットは、シュトゥットガルト室内管弦楽団のメンバーであったアンドレアス・スビーアが主宰する音と演奏にこだわったレーベル。真空管プリアンプなどの機材にこだわった録音をしている。収録曲は全てヴィヴァルディのコンチェルトで、2本のヴァイオリンのための～、2本のチェロのための～、3本のヴァイオリンのための～、ヴァイオリンとチェロのための～、が収められている。演奏はモダンなスタイルで艶やかなヴァイオリンの音色が美しい。高域の倍音を含んだ音色感もいいが、ソロ達とバックの響きの交錯するさまが見えるような音場感を持った録音。純度の高い音が楽しめる。カットリングはハーフスピードによって行われている。180g盤。